

二・
一 ツ瀬川流域の

暮ら
らし

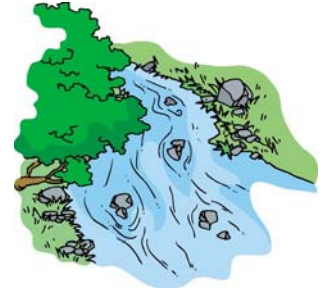
1 名前の由来と
言い伝え

1) 河川名の由来

) 一ッ瀬川の由来

一ッ瀬川は、熊本県境の国見山に源を発し、V字谷の秘境、米良の山中を流れ、杉安から平野部に入り、佐土原に至って日向灘に注ぐ、全流路91kmの大河です。かつての一ッ瀬川は、地域によって様々な名前と呼ばれていました。井倉（伊倉）村では「穂北川」、新田村、下富田村では「佐土原川」と呼ばれていました。また、河川内の中洲が川を2分していたために、左岸側（下富田村）では「佐土原川」、右岸側（下田島村）では「福島川」と紹介されています。

以上のように、各地において呼び名が異なることが分かりますが、古い書物に「一之瀬川」と出ており、この呼び名は西都市と西米良村の境で、一ッ瀬川と銀鏡川が合流する一之瀬の地名から付いており、現在の「一ッ瀬川」という呼び名のルーツになっているとも言われています。



) 大根川（三納川雁亀橋）の由来と言い伝え

三納川の雁ヶ亀橋の付近は、地区の人に「大根川」と呼ばれています。毎年大根の収穫時期になると、上流の長谷、下流の笠原付近は水が流れているのに対して、この札ノ元地区だけは水が無くなるため、大根が洗えない地区の人々は、この川を「大根川」と呼んだのです。

この大根川には、次のような言い伝えがあります。

昔、推古天皇の時代に、三納の札ノ元のある女が三納川で大根を洗っていたところ、みずぼらしい遍路姿の老人がやって来て「腹が減ったのでその大根を1本恵んでくれ」と言ったそうです。そこで、この女は手にしていた大根を返事もせず老人めがけて投げつけると、運悪く老人の目にあたり、片目が見えなくなってしまいました。一方、娘はそのことを知らぬふりして大根を洗い続けていると、川の水はだんだん少なくなり、大根を洗い終わらぬうちに川の水がなくなってしまいました。

それ以来、この周辺だけは、大根を洗う季節になると水が流れなくなり、土地の人は片目が小さくなったといわれています。大根を投げつけられた老人は、村の守り神である三社大明神、川上の妙見様（芳野神社）の化身といわれており、この神社にお参りする時には、大根を食べてお参りすると不凶なことが起きるとされています。

こうした大根川伝説は、全国各地に多く伝わる昔ばなしです。市内にも穂北の瀬江川が大根川と呼ばれています。冬場に水の流れない川を大根川と呼び、そこに現れる老人は、きまって弘法大師や近くの鎮守神の化身とされています。

2) 地名の由来

) 王子（王子の権現様）

一ッ瀬川河口北口の海辺に、王子地区があります。「王子」という名称は、神武天皇が幼少時代に遊行した所であるということから、この名がついたと伝えられています。また、土地が低く、つねに潮水害に悩まされていた王子地区は、いつのころからか権現様を鎮守の神として祀っています。

ある日のこと、海が大いにしけて、大波が押し寄せてきたため、村人が権現様に集まってお祈りをしましたが、風はますます激しくなり、海はいよいよ荒れてきました。そこで、村人達は心をこめて祈願を続けました。すると、どこからともなく1羽の白い鶴が海辺に飛んできて、荒れ狂う大しけの海をゆうゆうと飛び回ると、今まで荒れに荒れていた海が、瞬く間に静まったといわれています。それ以来、王子には洪水が押し寄せても、地区の人々への被害はなくなるとされています。

1 名前の由来と
言い伝え

）妻

西都市には都萬^{つま}神社がありますが、この「つま」という発音が地名の妻の由来とも言われています。都萬神社はコノハナサクヤヒメを祭る神社で、今から千年前の平安時代の延喜式という書物にもその名が出ています。神社の境内にはたいへん大きい楠の老木が数本あり、天然記念物として文化財に指定されています。こうした楠の老木の存在が、この神社が古い神社であることを示しています。



都萬神社

資料：さいと-古代ロマンとあふれる自然-

）佐土原

「佐土原」の地名の起源には2つの説があります。

1つ目の説は、昔からこの地方には、サドガラ（イタドリ）と呼ばれる竹に似た植物が生育する野原が多かったため、サド原と呼ばれたという説です。日向をはじめ九州では、「原」と書く原野のことは「ハル」と読みます。新田原、薩摩原、百町原、田原坂、みな原をハルと読みます。しかし、竹が一面に生えている所は竹ワラ、笹ワラなど、「ワラ」と呼びます。つまり、佐土原はサドガラがたくさん生えていたことに由来しています。

2つ目の説は、「里原」に由来する説です。「里原」という地名は、多くの人々が集まり住む地区を意味し、また栄える所を意味します。伊東氏は西都市の都於郡城（浮舟城）と佐土原に築いた佐土原城を根拠に、日向国内の48城を従えていたことから、各地から多くの人々が集まり、大いに栄えました。つまり、佐土原は「里原」であったところに由来しています。



サドガラ（イタドリ）

）銀鏡

「シロミ」というのは銀の鏡と書き、この地名の由来にも1つの伝説があります。

姉のイワナガヒメと妹のコノハナサクヤヒメの姉妹に父のオオヤマズミノカミは色々な土産物を持たせて天孫ニギノミコトところに送りました。ところが、イワナガヒメは顔形が醜かったので、ニギノミコトはコノハナサクヤヒメだけをとどめ、イワナガヒメは父の下に返しました。

イワナガヒメはこれをたいへん恥じて、鏡をもって自分の顔を写して見ると、龍の形に見えました。そこで、その鏡を後ろに放り投げると、その鏡は高く舞い上がり、東米良まで飛んできて高い杉の梢にひっかかりました。この鏡を御神体としてお祭りしたのが銀鏡神社で、鏡が白く光っていたことから、ここをシロミと呼ぶことになったと伝えられています。



銀鏡（しろみ）神社（西都市）
（資料：宮崎県地域振興課発行『ひむか神話街道 50 の物語集』）

）椎葉

「椎葉」は、壇の浦で敗れた平家の一族が隠れ住んだ所として有名な土地です。ここは「那須山」とも呼びます。那須というのは那須の与市や大八郎の那須と関係があり、実際に室町時代ごろに那須という豪族がいました。椎葉の名の起こりについては、那須大八郎が、平家の残党に巖島神社を祭らせたとき、その神社の屋根を椎の葉で葺いたから、椎葉と呼ぶようになったと伝えられています。椎葉には「椎葉」という苗字の人が多く、しかも明治の戸籍以前の江戸時代に多くなっています。これは椎葉という豪族がいたためとされており、こうした豪族の苗字は、たいてい地名から取ることが多いとされています。

1 名前の由来と
言い伝え

）鬼付女

新富町上富田の「鬼付女」の由来は、観音山と深い関係があります。

観音山は、西側を除いては険しく、人を近づけません。山の東端の山腹には「岩観音」があり、正観音が安置されています。岩屋は奥行き 2.4m、幅 3.6m ほどで、その昔には雄と雌の鬼が住んでいました。この鬼は、農作物を荒し、婦女子をかどわかすなど悪事のし放題で、村人が弱り果てていました。ここに九州に育ったという悲運の武将・鎮西八郎為朝が鬼退治にやってきて、船で海から岩屋の鬼に近づき矢を放つと、矢は雌鬼の目にささり、鬼は一目散に逃げました。それ以後、この観音山一帯を「鬼付女」と呼ぶようになりました。

）船津の里

児湯郡新富町の新田に、「船津」という所があります。神代の昔、ヒコホホデミノミコトが高屋に宮居されていた時、一ツ瀬川を下って田島荘へ向かう途中に、御乗船を着けたのがこの岸であったため、舟津の名が起ったと言われています。ちなみに、津は船着場を意味します。

）三財

「三財」の名は、天正 19 年（1591）の「日向五郡分帳」で、「児湯郡之部」に「1、3 財 30 町」とあります。それ以前にも、室町初期のものといわれている「荒武文書」の中で、「下散財」とあるのは「下三財」のことだと考えられます。元来、「在」の意味は在郷の略で「田舎」のことを指します。この頃には既に散在（さんざい）と通称されており、しかも上散在と下散在とに分かれていたことが推察されます。この散在がもととなって「三財」に転化したものと考えられます。

）田無瀬 別名「山神之瀬」

西米良村田無瀬地区付近には、川に多くの魚が集まり、魚の捕獲に条件の良い所でした。そこで「タブ」という魚をすくう道具を使って容易に魚をすくい上げていました。そのため、この地が「タブの瀬」と言って語り継がれ、これがなまって後年にタムゼと変わりました。

また、米良の一漁夫が「タブ」をかついでこの川瀬に出かけたところ、山神が魚網にかかりました。漁夫はその山神を逃がしたことから、山神之瀬ともいうようになったとも言われています。



写真：中武雅周氏より提供

昭和 9 年頃の田無瀬

）船倉

一ツ瀬川に架かる新瀬口橋のたもとにある「船倉」という地区は、西都方面の産物を福島港まで運ぶ小船の出入りする小船舶場であり、船蔵が多くあったことから「船倉」と呼ばれるようになったと言われています。福島港に碇泊している大型船は、一ツ瀬橋付近から上流は河床が浅くなっており上ることができなかつたため、小船による輸送に頼っていました。

3) 伝説・言い伝え

）桜川の桜子（西都市法元）

西都市の法元に流れている川を、土地の人は桜川と呼んでいます。

その昔、桜子という娘が母と二人で細々暮らしていました。桜子の父は、桜子が生まれるとすぐに他界してしまったので、母が働きに出て日々の暮らしを立てていましたが、母は過労が重なって寝込んでしまいました。ちょうどその頃、人買が横行していたので、桜子は身を売った代金で薬をかうようにと、母に手紙を残して行

1 名前の由来と
言い伝え

き先も告げず出て行きました。それを知った母は、必死になって娘の後を追いかけてきましたが、行方はわかりませんでした。

桜子は常陸国（茨城県）まできましたが、人買があまりに悪者だったために逃げ出し、磯辺寺の住職に助けられ、3年の月日がたちました。ある日、住職が寺の下を流れる桜川で1人の女が「ここは桜川 我が子は桜子 なつかしや こいしや」と歌っているのを見ました。尋ねてみると、女が言うには、自分は筑紫日向のもので、たった1人の我が子を買にとられ、後を追ってここまで来たが見つかることができない。さてはと思い、住職はその女を桜子に会わせてところ、母と子は抱き合い、再会を喜びました。そして、母の病氣も治り、親子連れだって、郷里の桜川に帰りました。



桜川の伝説
(資料：宮崎県地域振興課発行『ひむか神話街道 50の物語集』)

) 杉田六之助河童退治 (佐土原町)

上田島の堤に杉田六之助秀次という武士が住んでいました。六之助は、地区のすぐ北側を流れる三財川に、仲間と一緒に梁（待網）をかけました。しかし、ここ数日曲者が出没し漁を邪魔しているのです。今夜もまた、誰かが漁の邪魔をしています。「さてはまたきおったな、よし覚えておれよ。今日こそは。」と、手もとのナタ鎌を握り暗い水面をぐっとにらみつけ、ナタ鎌をふりおろしました。「ギイッ！」という泣き声があがり、確かな手ごたえがありました。すると、水しぶきの中から黒い怪物が浮き上がり、六之助はその怪物をつかんで川原にたたきつけました。動かなくなった怪物は、河童でした。

ところが数日後、堤には多くの病人がでてきました。六之助も熱にうなされ続け、その夢の中に河童が現れ「漁の邪魔をしたことは悪かった。許してくれ。でも、私をいつまでも河原に晒し者にすることは恨みます。」といいました。その形相が凄かったため、六之助は「そりゃ、わしが悪かった。許してくれ。」と話を続けようとしたところ、夢から覚めてしまいました。そこで、六之助はひからびた河童を懇ろに弔い、河原を清め、石を積んで葬ると、その後はびたりと病氣は止んだといわれています。

) イワナガ姫の神話 (米良の由来)

銀鏡(しろみ)の由来となったイワナガヒメは、「米良」についても由来を持っています。

イワナガヒメは、一ッ瀬川をさかのぼって米良山中へ向かい、今の穂北の笹の元から竜房山を経て小川に出向きました。その後、田を自らつくり、実りゆたかな収穫を見て、ヨネヨシヨネヨシ(米良し)と喜びました。これが「米良」の名の起こりであるといわれています。



イワナガヒメ
(資料：宮崎県地域振興課発行『ひむか神話街道 50の物語集』)

) お乳の神様 (西都市九流水地区)

三納には、八方塚という千メートル級の山が1つあり、そこから流れ出した九つの川が1ヶ所に集まったところが九流水です。その九流水のお寺の前に川下の方を向いた大きな乳がある不思議なエノキが生えていました。その乳房からは乳が流れていたことから、村人はこの木を「お乳の木」と呼んでいました。乳飲み子を持つ母親たちは、乳が出なくなると「お乳の木」にお参りしました。すると、不思議なことにお乳が出るようになるので村中の評判になり、遠い所からもお参りするようになりました。

1 名前の由来と
言い伝え

ある年、畑にのびてきた「お乳の木」の根を切ってしまいました。すると、だんだん乳も出なくなり、「お乳の木」は枯れてしまいました。それからは村に不吉なことばかりが起こり、翌年には大洪水になりました。村人は相談して、代わりになるエノキを隣村の穂北でどうにか見つけ、それを元の場所に植えました。すると、不思議なことに、その年から洪水もなくなり豊作が続きました。やがてこの榎もぐんぐんと枝がのび、2つの乳房が出てお乳が滴り始め、ふたたび近郷近在からこのお乳の木にお参りする人が多くなったということです。



資料：西都市報「一ツ瀬植物夜話」

めぐりぶち
) 曲 淵 ~ チヨと勘介の悲話 ~ (米良)

曲淵は、今でこそ浅い谷川ですが、かつてこの淵の長さは全長 110m、幅 24m ほどのやや曲がった深い淵で、水神の邸とされており、勘介とチヨ夫婦の悲しい物語が伝えられています。

~ 勘介とカッパ ~

勘介がこの川筋の見回りを行っていたある日、勘介は先の大雨で川の水かさが増えて橋が 1 本壊れたため、橋をかけるための石積みをしていたところカッパを見つけました。勘介は、「この間から石積を片っ端から崩しているのはこいつだな」と感づき、カッパに飛びついて捕まえ、カッパを家の納屋の柱にくくりつけました。その後、カッパは縄を切り、川の方へと逃げ去りました。夕方帰宅した勘介は、何もとがめる事無く「これでカッパもいたずらを止めるだろう」と言いました。

~ チヨの祈願 / 豊猟によるこぶ ~

ある秋、猟の好きな勘介でしたが、どうも猟がうまくいきませんでした。チヨは勘介を心優しく慰め、昔から水神様の淵と噂される曲淵へ行き、「勘介の猟が効くように、来春の彼岸までに私の命をお預けします。」と曲淵水神に 3 日間通い続けて祈願しました。その後、勘介は猟にできれば猪や鹿を持ち帰り、その年は豊猟でした。

~ チヨの死 ~

春が近くなったある日、チヨは満願の御礼に曲淵の岩の前に立ち、しばらくの猶予をお願いし、家に帰りましたが、家にたどりついた時、バツタリと倒れ、息絶えてしまいました。勘介は驚き、悲しみ嘆きました。勘介はチヨを懇ろに葬り、曲淵の辺りに小さな祠を建て、ここに水神を祀り、100 日間参り続けました。その後、勘介は神事を習い、曲淵水神の神主となり、チヨの霊を吊ったと言われています。



おにびつ
) 鬼 櫃 (石櫃)

西米良村には昔から大きな石の櫃 (4~5m 四方) がありました。

ある時、鬼どもが毎晩町や村を荒し廻って宝物を盗んできては、この櫃の中に隠していました。これを知った村の人々は、この櫃の在りかを探し当てて取られた宝物を取り返すことにしました。「さあ大変」と鬼どもは、この大きな石櫃を持って逃げる事にしました。米良川を下り始めましたが、越野尾の手前に来たところで夜が明けてしまいました。川の中に置いてある石櫃を見つけた町や村の人々は、宝物を取り戻そうとしましたが、腹がせくやら、頭がうなるやらで、とうとう諦めて川の中に置いたまま帰りました。

ある日、山師たちがこの櫃のそばで暖を取る為に火をたいていました。すると石の櫃が「ウオーン、ウオーン」と音を出してうなりだし、驚いた山師たちは道具などほっぽり出して逃げました。その後、トモース、カッチンと伝え、この石を鬼櫃

1 名前の由来と
言い伝え

というようになりました。

現在、この櫃は九州電力一ツ瀬川電源開発工事の際に野地堰堤建設によって爆砕され、一ツ瀬ダム湖の湖底に沈んでいることから見ることはできません。

）米良の上漆（漆兄弟物語） 西米良村木浦地区「蛇淵」

昔、米良の里にウルシを掻いで、その汁（漆）を集めて暮らしている兄弟がいました。兄がいつものように山で漆を掻いている時によき（斧）を川の中に落としてしまいました。兄が水に飛び込み淵の底を探していたところ、驚いたことに、淵の底一帯には、漆がゆったりと溜まっていた。兄はずっと昔、この辺にはウルシの大木が沢山生えていたという話を思い出しました。洪水のとき、ウルシが倒れたり皮がはげたりして、雨に流されて漆が淵に溜まったのです。兄は淵の漆を取って、売りに行ったところ、その漆は高く売れました。

弟は、このごろ兄が一人で漆を取りに行くことや、上等の漆を取ってくるのが気になっていました。そこで、弟は兄の後をつけ、淵の漆の秘密を知り、兄に隠れて淵の漆を取るようになりました。それに気づいた兄は、どうしたら独り占めできるかと考えました。ある時、兄は木彫りの龍を買い、その龍を淵に入れ、水の方で自然に動くように仕掛けようと考えました。その龍を淵に入れる時に、「龍よ。この淵の漆を守るのだ」と、龍に話しかけました。

弟が、いつものように漆を取りに潜ると、恐ろしい龍が襲いかかってきたため逃げ帰りました。それを見て兄は安心し、次の日、淵にゆっくりと潜っていきました。すると、目玉をぎらつかせた龍が急に襲いかかり、今にも兄を飲み込もうとしたため逃げ帰りました。木彫りの龍に、いつの間にか魂が入っていたのです。

それからは、二人とも、淵の漆を取りに行くことができませんでした。兄は、弟と仲良く漆を取ればよかった、と後悔しました。淵には、上等の漆が沢山残っていたのですから……。

実際に西米良村小川地区の小川川に蛇淵は存在します。周辺の岩は削られて深い溪谷になっていますが、蛇淵だけは白くてスベスベした花崗岩が細長く走っており、削り残されて滝となり、真下に深い淵ができています。その上流地帯の小川の源流に有名な布引滝があり、周辺の崖地に見られる植物の中には紅葉が美しく、漆液をだすと言われるハゼノキ・ヤマハゼ・ヤマウルシ等が多く生育しています。この周辺で漆を栽培したという記録はありませんが、上記から蛇淵の底に漆が溜まっていたという話には真実味があります。



蛇淵の滝

資料：西都市報「一ツ瀬植物夜話」

2 流域の産業

1) 水産業と漁法

一ツ瀬川流域には4つの漁業協同組合（新佐、一ツ瀬川、西米良、椎葉）があり、宮崎県に認可を受けている魚介類の資源保護のために放流を行っています。放流している魚介類は、アユ、ウナギ、ヤマメ、コイ、オイカワ、ニジマス、フナ、モクズガニなどがあります。

これらの魚介類は、投網、金つき、かご、笥、釣り（ウナギタカンポ、カセバリ、友釣り、毛針、ころがしなど）などで捕獲されますが、近代までは以下の漁法等を用いて魚介類を捕獲していました。

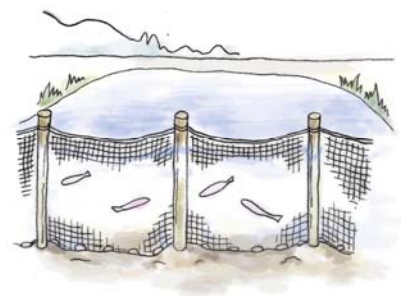
【船うち】

両岸から船数隻で河川中央に向かって魚を追い込み、両側の投網が掛からない程度の位置にきたら一斉に投網を打つ漁法。櫓を用いて船を操る「舵子」、投網を打って魚をとる「網打」の2名一組でチャブネという手作りの木船に乗った。チャブネには長細形の宮崎型、短太形の高鍋型があった。



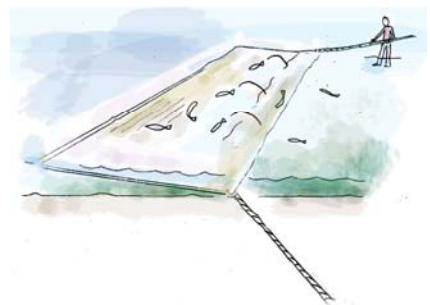
【建て網】

干潮時に杭を打ち、網を干潟に埋め込んでおき、満潮直前に船から網を引き上げて入江（ワンド）に入り込んだ魚を取る漁法。漁に適した入江（ワンド）が無くなったため、現在は行っていない。



【戸板引き】

満潮から潮が引き始めたときに藻場にいる魚を狙って戸板を両側から引き、逃げるために飛び跳ねて戸板の上に落ちたボウなどを捕獲する漁法。良好な藻場が無くなったため、現在は行っていない。



2 流域の産業

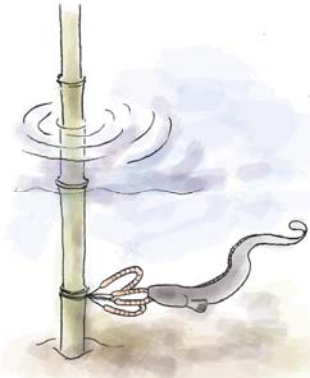
【チヌかご】

直径 40cm 程度の輪の上に高さ 40cm 程度のかごを竹で編み、カニをたたいて土とこねた餌を一晩程度入れておき、かごに入ったチヌ、ガザミ（ワタリガニ）などを引き上げて捕獲する漁法。



【せんつなぎ】

ミミス数匹を木綿糸に通して輪に束ね、竹竿の先に取り付けてウナギやガニ（モクズガニ）のいるような箇所に沈めておき、ウナギやガニがミミスに噛み付き、歯が木綿系にかんで取れなくなっているところを引き上げて捕獲する漁法。



【流し】

引き潮時に船を潮の流れに任せ、舳先に座ってライトを持った片手で水面を照らし、もう一方の手でライトに寄ってくる魚を金つきで刺して捕獲する漁法。ウナギ用の金つきの矛先は短く、矛先の長さは一本おきに長短になっている。他の魚用の矛先は長く、長さは揃っている。



【待ち網】

増水時に小河川を堰き止め、開いている箇所に円錐型の網を設置して流れてくる魚を捕獲する漁法。



2 流域の産業

【竹芝づけ】

メダケの束に重石をつけて河川に沈め、次の日に河床から浮かせたところを大きな網でメダケの束ごとすくい上げてウナギ、モクズガニ、エビなどを捕獲する漁法。



【ノボリ子採り】

河川の水際付近にノボリ子（1～2cmのハゼの稚魚）用の箱を設置し、石などで箱に入るよう誘導して箱に入ったノボリ子、エビなどを捕獲する漁法。



【貝殻引き】

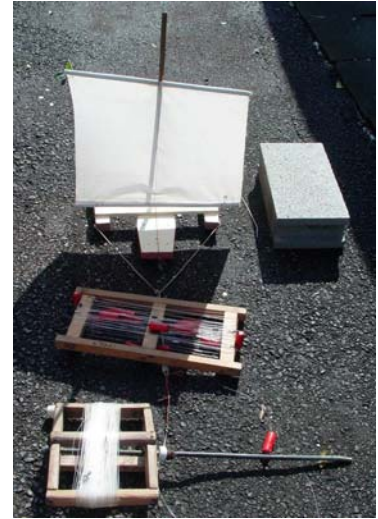
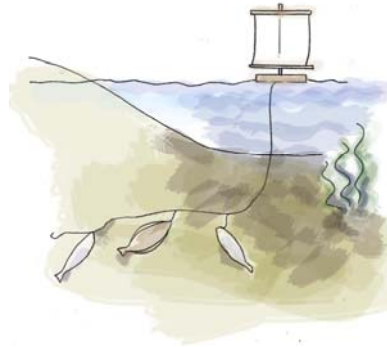
川岸に近いところにいる魚をとる時に使用する。貝殻をほぼ等間隔につけた約 20mのロープの両端を一人が川の中、もう一人が川岸で持ち、上流から下流に向かって魚を追い込み、先に待ち受けている網で捕獲する漁法。



2 流域の産業

【帆掛釣り】

河口潟の海側砂州から陸側に向けて長さ50cm程度の帆船にテグスとサビキの仕掛けをつけて流し、魚がある程度掛かったところで引き上げて捕獲する漁法。



【うぐい】

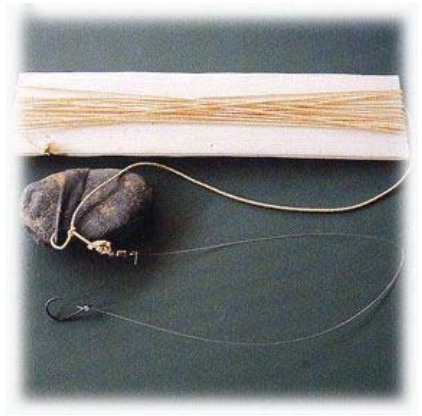
灌漑用の溜池を干した時や、浅い水の中(泥水)のコイやフナ等をとる時に使用する。魚のいるような場所に上から籠を伏せ、手ごたえがあると上の穴から腕を入れて魚を掴み取る漁法。



【 現在も使用されている漁具 】



ウナギタカンゴ



かせばり

(写真：リフレッシュ西米良 calendar)

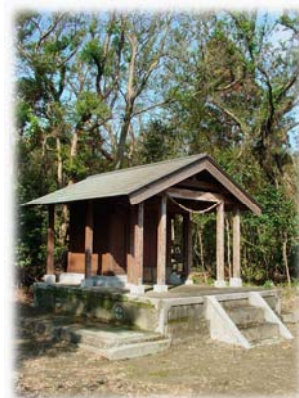
2 流域の産業

2) 製塩業

かつて、一ッ瀬川河口付近の二ツ建、平松、大炊田には入浜式の塩田が広がり、その面積は県全体の約1/4、従業員は約1/5を有する県内有数の製塩地でした。入浜式の製塩法とは、塩田の溝に海水を通し、その海水を塩田の砂に撒き、乾いたらまた撒くという作業を何回か繰り返し、塩分を多量に含んだ砂が乾いて厚さ2cm前後のコッパ（薄い板状の砂の塊）になったところで、このコッパを集めて塩水で漉して濃塩水にし、さらに釜で煮詰めて塩を作る製法です。

明治38年、塩が国の専売となったことから、製塩業は順調に発展しましたが、その後、安価な外国塩におされて次第に姿を消し、塩田は水鳥と小魚のすむ入江へと変わっていきました。ところが、太平洋戦争時の塩不足により製塩業は一時的に再開され、終戦直後の昭和21年の半ば頃まで続きましたが、昭和23年に再び廃止され、堤防が完成した昭和25年以降は、かつての塩田は水田や養鰻場へと姿を変えていきました。

現在は、新富町の王子地区に残る塩竈神社が、その当時の姿を偲ばせています。



塩釜神社

3) 林業

日向地方は良質の木材（マツの巨木など）が多いことで有名であり、林業は古くから盛んでした。江戸時代中期以前にはマツの巨木を切り出して東大寺（奈良県）に納めたり、明治期の終わりまでは大和墨の原料として硝煙を取って奈良に送ったりしていました。伐採樹木は、明治期までは天然のマツ、ケヤキ、スギ、モミ、トガ、カシ、コウヤマキなど様々な樹木を対象としていました。その後、大正期に入ってから生長が早いスギ・ヒノキの植林が始まり、主流となっていきました。しかし、スギ・ヒノキ植林は従来の樹種に比べ保水力が少ないことから、山全体の保水力が低下し、湧水が少なくなりました。

木材の運搬は米良街道が難所だったため、伐採した丸太を一ッ瀬川などの河川を利用して下流に流していました。伐採地から一ッ瀬川まで距離がある場合は、「木馬（きんま）」を利用した人力による運搬や、人工的に鉄砲水を起こす「鉄砲堰」を利用した運搬により丸太を一ッ瀬川まで流しました。一ッ瀬川を下った丸太は、明治期までは杉安で筏を組んで佐土原の福島港まで流して出荷されていましたが、大正期からは杉安で水揚げされ、製材所で加工された後に妻線の杉安駅から貨車で出荷されました。

なお、源流部の椎葉村では、一ッ瀬川は木材を流す条件を満たしていなかったため、馬引きにより水上村方面に輸送していました。樹種は米良と同様の種が多かったですが、紙の材料となるミツマタなども出荷していました。



木馬



油を塗布して滑りを良くする



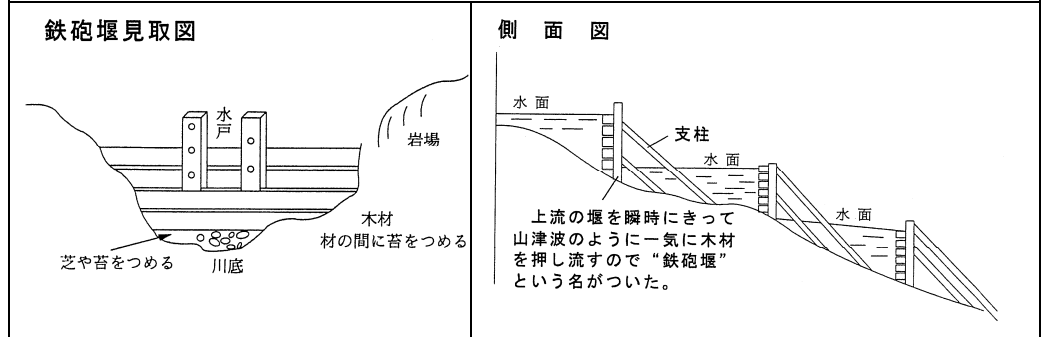
木馬道を引いて運搬する

写真：西米良村役場写真集

2 流域の産業

参考資料 鉄砲堰

奥地の谷間では、木馬道の設置や木馬による陸運が困難であり、水量も少なく、まともな方法では木材は流せない。そこで考案されたのが「鉄砲堰」による運材方法である。この方法は谷川の両岸が割合狭く、岩石がしっかりしている所に堰を造り水を溜め、そこに浮いた木材を堰をきることによって一気に木材を流す方法である。



4) 製炭業

西米良村では製炭原木は豊富にあったが、米良街道が難所であったため製炭はほとんど行われませんでした。明治33年に杉安～村所間に県道が開通したため、急激に製炭業が盛んになりました。大正から昭和にかけては製炭業が主産業であり、昭和22年頃に生産量日本一になりました。

木炭の生産は山師と呼ばれる紀州（和歌山県）などからの出稼ぎの人々が行い、地元民はほとんど製炭を行っていません。山師の親方が地元民から山を借り、山師が雑木林の樹木（シイヤカシなど）を伐採し、炭小屋まで「木馬（きんま）」などを利用して運搬し、窯を用いて炭焼き（黒炭、備長炭）を行いました。山師達は山の樹木が無くなったら別の山を借りて炭焼きを続けました（伐採した樹林地はシイヤカシの萌芽により14～15年で回復）。生産した木炭は筵で巻いて包装し、農作物のひえ、あわ、そば、シイタケなどと一緒に馬の背に乗せて米良街道を下り、西都市方面に運搬していました。

なお、西米良村には山師が大量に移入してきたため、人口は一時7,000人くらいに増加しましたが、エネルギーの変換により木炭の需要が減少し、製炭業が廃れたために山師達は西米良村から去っていきました。



炭焼きの風景（イメージ）

2 流域の産業

5) 農業

【平野部の農業】

新富町

総土地面積の36.1%を農地が占め、その農地は水田と畑がほぼ半々です。水田地帯では早期水稻や施設園芸が盛んです。高台の畑地帯は、葉たばこ・茶・花き等が栽培されています。その他にはそばの栽培でも有名です。果樹では、みかんの「南香」「日向夏」や他にマンゴー等の栽培も行われています。

佐土原町

平均気温17℃という温暖多照な気候を利用した施設園芸が盛んで、キュウリ、にがうり、トマト、しょうが、ユリを中心とした花き、等の栽培が行われています。なかでもキュウリの生産量は高く、平成13年度には全国でも第8位の生産量でした。花き栽培ではテッポウユリが県内第1位の生産量もち、品質も評判が良く「佐土原ブランド」としての地位を築いています。

西都市

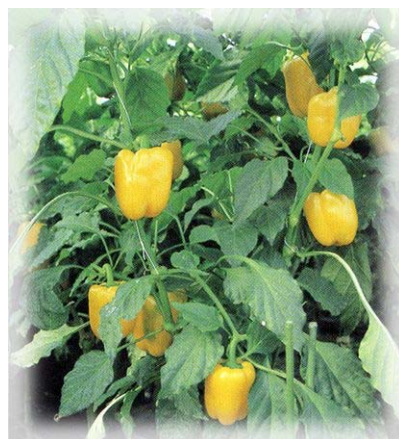
野菜、果樹を中心とした施設園芸に加え、水稻も盛んに生産されており、なかでもゆず、マンゴー、キンカン、葉たばこは全国有数の生産地で、ピーマン、スイートコーン、にがうりは、全国第1位を誇る生産量です。ピーマンの生産は昭和40年頃から盛んになり、昭和60年をピークに減少に転じましたが、平成15年では昭和40年の約16倍となっています。その他マンゴーは全国第3位の生産量です。

西米良村

九州中央山地に囲まれ、総土地面積の96%が山林・原野で占められており、農林業が盛んです。野菜、果樹、花き等の多彩な作物が生産されており、中山間地帯では地域の特性を活かした「ゆず」や地形や環境に適した「ホオズキ」、高地栽培による「パンジー」「スターチス」等花の苗の栽培も行われています。

椎葉村

総土地面積の96%を山林が占め、自然美にあふれた豊かな風土を形成しています。夏期の冷涼な気候に恵まれ、夏秋野菜や菊を主とした花きの産地です。その他、シイタケ、そばの栽培も盛んで、なかでもシイタケの生産量は全国でも上位です。



カラピーマン



キンカン

2 流域の産業

【山間部の農業】

- 焼畑（コバ） -

米良地方は山または山の谷あいの村落ばかりで、猫の額程の平地に住み、僅かな畑地を耕して雑穀を主食にして暮らしてきました。そのため、自給できる家が少なく、移入せざるを得ない状況にあったことから、必然的に「焼畑（コバ）」に頼らざるを得ませんでした。

「焼畑」には土地の肥えた所が選ばれます。そこには当然大きな木も立っており、切り倒すのは大変な作業でした。大きな木をそのまま残しておく、枝葉に日光がさえぎられ、

「焼畑」の作物が育たないことから、樹上十数メートルまで

登って枝を切り落とす「木おろし」作業が必要でした。この作業は大変危険で、作業の安全を神様にお願いし、自らの心を静めるために作業の間中歌った祈りの歌が「木おろし唄」です。山中に朗々と流れる歌声は、近傍で聴く人々に作業をしている人の無事を知らせることにもしなりました。

「木おろし」は、大木が多かった明治期に盛んに行なわれましたが、大正期に入ると大木は木材、木炭の原木等に伐採し、残った小木を伐って「焼畑」にしました。大正末期頃まではアワ、ヒエが主な作物でしたが、昭和期には「米良大根(糸巻き大根)」、ソバ類、イモ類を栽培し、その後は山茶が自生していました。地力が落ちてからは15年程度休閑地としておき、再度木が繁茂した頃に「焼畑」を繰り返します。

現在、焼畑は禁止されていますが、西米良村の小川地区においてモデル区画を設け、焼畑農法の伝承を行っています。



米良大根¹
(糸巻き大根)

*写真 1,4 : 西米良村役場写真集

*写真 2,3 : リフレッシュ西米良 calendar



焼畑づくり（近景）²



焼畑づくり（遠景）³



木おろし⁴

3 流域の交通

1) 街道（米良街道）

佐土原城下（現佐土原町）から三納村尾泊（現西都市）を経て、肥後国米良山を通り同国球磨郡へ抜ける街道で、佐土原城下から尾泊までを米良往還、尾泊から肥後湯前（現熊本県湯前町）までを球磨往還とも称していました。

米良街道は狭く急坂路が続く難所であったため、古くは人・馬牛の背に荷物（米良方面からは農作物等、西都方面からは生活物資等）をのせて行き来していました。その後、道路のルート変更、拡幅に伴って「荷馬車」から「オート三輪トラック」、「自動車（戦時中は燃料不足のため「ガス発生炉を積んだ木炭自動車）」、「トラック」等へと交通機関も転換していきました。しかし、トラックなどは後輪 2 本のタイヤのうち外側一本は路肩の外にはみ出して通行したり、路肩の壊れたところにスギ丸太 2 本を並べ敷いて通行したりと道路事情はかなり悪かったようです。そのため、蛇淵の坂付近などではトラックなどの落下事故が頻繁に発生し、死傷者が続出していました。そのような緊張の連続運転から開放される場所として、現在の杉安ダム下流の蛇行部付近は、米良方面から杉安方面への道が急に開けて見え、本当にホッと安心することから、「ホット岬」と呼ばれていました。



オート三輪トラック



ガス発生炉を積んだ
木炭自動車

2) 鉄道（妻線）

宮崎県は明治 44 年に宮崎から佐土原を経て下穂北村妻に達する妻線に着工し、まず大正 2 年に宮崎～福島間、同 3 年に福島～佐土原間、同 4 年に佐土原～妻間が竣工して営業を始め、大正 6 年に妻線は国営となりました。この当時は宮崎県の沿岸部を縦断する日豊本線は開通しておらず（開通は大正 12 年）、宮崎県内でも先駆けて建設された路線の一つでした。



杉安駅舎

さらに、宮崎・熊本両県が提携して、人吉～妻間を鉄道で結ぶ日肥鉄道を計画しましたが、人吉の方は湯前まで、妻の方は杉安までとなり、計画は中断しました。妻～杉安間は、穂北平野の開発と米良方面の豊富な林産物の搬出を十分に果たすことを目的とし、大正 11 年に延長されました。また、大正 5 年には宮崎～都城間が完成したことから、米良、穂北方面の産物を鹿児島に運搬し、九州本線を通じて本州まで搬出することが可能になりました。これにより内陸部の経済は中央の市場と直結し、上穂北村の杉安、下穂北村の妻は内陸部の中心地として発達していきました。



杉安駅ホーム

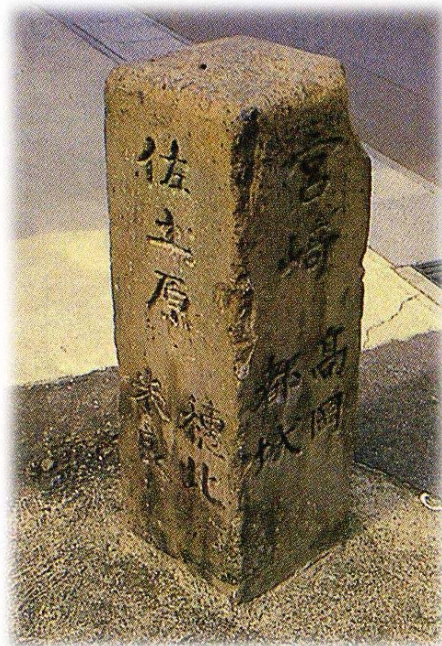
3 流域の交通

3) 舟運

福島港

単調な砂丘の続く日向灘中部海岸には、今は港らしい港はありませんが、一ッ瀬川河口付近の福島港は、江戸時代を中心に、中部沿岸における商港、漁港として遠く大阪方面との取引の中心として栄え、上流の米良、西都方面の薪炭、木材、椎茸等の積出し、石灰、肥料、酒類、食品等の陸揚げ港として、また国道の要地として賑わっていました。特に米良、穂北方面からの木材の筏による川流しにより、一ッ瀬川の南岸には木材が山積みされ、水流は筏で埋められるという景況でした。

隆盛を誇った江戸時代あたりは、現在とは流れが異なり、水深も5~6m以上に達する淵があり、ずっと上流まで青々とした淵が澱んでいました。大阪方面と交易する



福島に残る道しるべ

和船(千石船)が碇泊し、威勢のよい船頭、水夫、仲仕の数も多く、満帆風を孕んでの出船、入船で賑わった福島港は、宮崎赤江港と並んで、交易運輸の中心として隆盛を極めていました。最盛時には、銀行、郵便局、駐在所、旅館、芸者屋兼料理屋、商店、床屋、馬車屋、倉庫、製材所等軒を並べ、総戸数100戸をこす繁華街で、清流に屋形船を浮かべて絃歌に明け暮れる姿も見られました。

しかし、大正期に妻線が開通した頃から輸送量は減少し、大正8年を最後に宮崎県統計書の統計欄から福島港の名前はなくなりました。筏、荷馬車、和船といった河川に関連する輸送手段は、大量輸送が可能となった汽車にとって代わられたのです。

運河

一ッ瀬川と石崎川の間には、佐土原藩時代に長さ約3.4km、幅約20mの堀川とよばれる小運河が掘られていました。しかし、運河としての機能の重要性を失い、利用が途絶えると次第に埋まりました。今は新田、養鰻場に代わり、小溝やタンポリ(小さな水溜り)にその面影を留めるだけです。

渡し

渡しとは、主要な街道や地元住民が利用する生活道路が川を越えて向こう岸に渡るために渡河する場所であり、その渡河方法には様々なものがありました。主なものは、舟、はこいた箆板、徒歩などがあげられますが、米良などの山地では川幅が狭いため、箱ヤエンや筏も利用していました。

また、季節によって渡河方法を使い分けしていました。川の流量の変化を見ると、流量が多い夏季は舟、流量が少ない冬季は箆板、川の流れが緩やかな箇所では水温の変化を見ると、暑い夏季は徒歩、寒い冬季は箆板といった使い分けもしていました。

なお、渡しのある箇所には水難がつきもののため、必ず水神様が祀られていました。

3 流域の交通

明治前期には宮崎県内の主な河川に約 140 箇所の渡し場があり、約 100 隻の渡し舟が活躍していました。なかでも最も多かったのは大淀川で約 50 箇所に約 40 隻の舟があり、一ツ瀬川はそれに次ぐ約 25 箇所に約 20 隻の舟がありました。その後、橋の建設により渡しは少なくなりますが、昭和初期には一ツ瀬川流域（支川も含む）では 25 箇所の渡しがあったと日向地誌に記載されています。



昭和初期の柳瀬渡し

参考資料 昭和初期の一ツ瀬川及び支川の渡し

渡し名	渡河方法		河川名	村名			
	夏季	冬季					
戸敷渡	舟	筆板	三財川	下三財村			
興禅寺渡	徒歩	筆板		藤田村			
青山下渡	徒歩	筆板		平郡村			
根本下渡	徒歩	筆板	三納川	三宅村			
石神渡	舟 (1 隻)	舟 (1 隻)	三財川	右松村			
祇園渡			調殿村				
千田ノ渡			南方村				
山角下渡							
阪江渡							
立野渡			舟 (1 隻)	舟 (3 隻)	一ツ瀬川 (穂北川)	穂北村	
下津留						岡富村	
千田渡	舟 (1 隻)	舟 (3 隻)	一ツ瀬川 (穂北川)	井倉村			
千畑渡	舟 (1 隻)	筆板		黒生野村			
岡富渡	徒歩	筆板	三財川	現王島村			
彌六渡	舟 (1 隻)	舟 (1 隻)		一ツ瀬川 (佐土原川)	新田村		
配拂渡			上富田村				
濁り川渡							
中島渡							
一ツ瀬渡			舟 (1 隻)		舟 (1 隻)	一ツ瀬川 (米良川)	尾八重村
柳瀬渡							中尾村
竹淵渡			筏舟 (1 隻)		筏舟 (1 隻)	一ツ瀬川 (米良川)	上富田村
荷園渡	尾八重村						
大淵渡	中尾村						
吐合渡	筏舟 (1 隻)	筏舟 (1 隻)	一ツ瀬川 (米良川)	尾八重村			
的場渡				中尾村			

出典：日向地誌

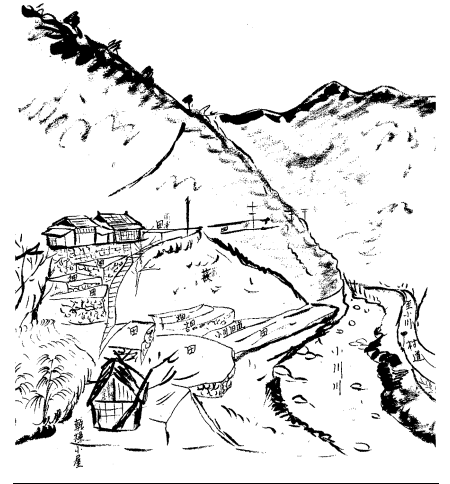
4 流域の建造物

1) 住居の建て方 (西都市銀鏡地区)

住居には母屋の方位を南向きにとることが基本であり、北向きには建てないという伝承が強く残っています。

元々は山地の中腹に建てていましたが、道路の敷設や川沿いの整備に伴い、道路や川沿い、川に近い緩傾斜の土地などに生業との関係を考慮して建てられるようになりました。このように居住地が変化した理由として、良い飲料水の確保があげられます。

しかし、水利を求めて河川に接近する反面、西都市の銀鏡地区では、水害の危険からのがれることを宅地選択の条件としていました。そのため、川に近い緩傾斜地区の土地が居住地として選ばれています。



資料：古里越野尾

2) 三財川と都於郡城 (西都市)

城は、時代によってその構造が異なりますが、大きく中世の城と近世の城とに分けられます。都於郡城は中世の城の典型ともいえるべきものです。この都於郡城は今から600余年前の南北朝時代、伊東氏の祖先である伊東大和守祐持が築いたもので、その子祐重のときにさらに修築したと伝えられています。

都於郡城は、標高100mの台地にあり、廻りを急峻な断崖に囲まれ、西北方は三財川が外堀の役割を果たし、五つの城郭から構成された堅固な城で、遠くから眺めた様が、舟が浮いているように見えたことから、別名「浮舟城」と呼ばれています。建物の配置は、中央に城主のいる本丸、その西側に二の丸と三の丸という兵溜まりを配置した城がありました。その北側に奥城という一郭があり、ここは城主の家族がいた所と伝えられています。

都於郡城は、中心に本城があり、この本城は三財川を西の堀とし、東と南は堀と池で二重三重に囲まれ、更に北と東と南には多くの出城がありました。このように1つの独立した城ではなく、幾つもの城を伴っている城を複郭の城といいます。この城は、三財川の東側の山地一帯に大小の城と堀とを作って、1つの要塞のようになっていました。



都於郡城の鳥瞰

資料：さいと-古代ロマンとあふれる自然-

4 流域の建造物

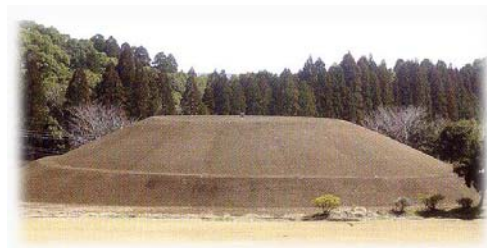
3) 古墳群 (西都原古墳群と一ッ瀬川流域の古墳群)

宮崎県には、特別史跡公園となっている西都市の西都原古墳をはじめ、壮大な前方後円墳が広々とした大地に群在しています。

特に一ッ瀬川流域は、日向国内の各河川の流域の中でも古墳の数が多く、また種類も多く、さらに古墳の大きさも随一です。新富町の新田原古墳群、東田原古墳群、西都市の茶臼原古墳群、三財古墳群、三納古墳群、上穂北古墳群、清水西原古墳群などもその例です。

西都原古墳群は、西都市の中央に位置し、一ッ瀬川の南山岸にある東西約 1500 m、南北約 4 kmの洪積台地上に、大小 311 基の古墳があり、壮観極まりない景観を呈しています。西都原古墳群は、大正の初頭、当時の有吉忠一知事の英断により学問的な調査が試みられました。壮大な前方後円墳の群在は、おそらく 4 世紀頃から発達したものと考えられ、柄鏡式といわれるように前方部が細く長い特殊な形態のものも多く、また粘土槨なども多くなっています。

また、永野原台地上に位置する古墳群は、通称「百塚原古墳群」と呼ばれており、同古墳群のうち 1 基からは、本県唯一の国宝である金銅製の馬具類が発見されています。



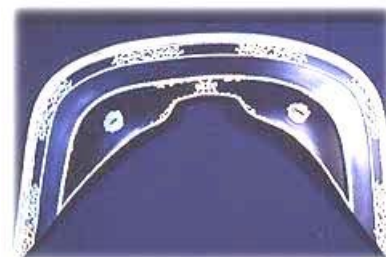
飯盛塚 (169号墳)



鬼の窟古墳 (206号墳)

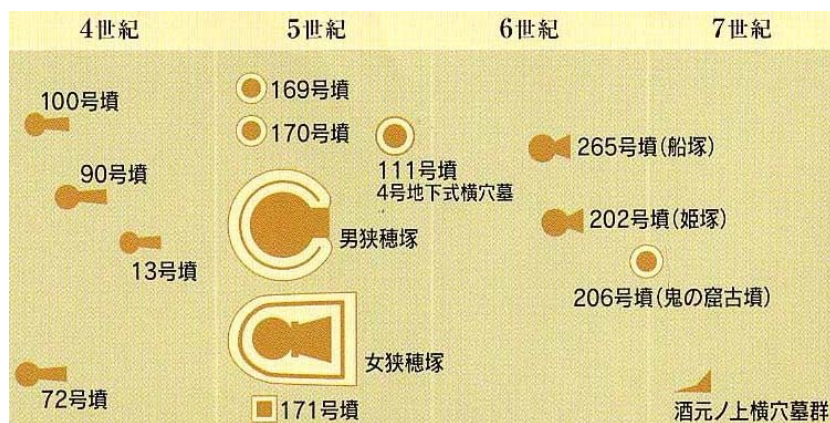


陵墓参考地 (男狭穂塚、女狭穂塚)



国宝「金銀馬具」

参考資料 年代別古墳一覧 (西都原古墳群)



資料：さいと-古代ロマンとあふれる自然-

5 流域の土木建造物

1) 堰

) 杉安井堰

杉安井堰は、児玉久右衛門により、享保7年(1722)4月に竣工しました。

児玉久右衛門は、一ッ瀬川から水を引いて旧南方村に通し、水田を開墾する構想をまとめ、延岡藩庁から堰及び水路の建設許可を得て、工事に着手しました。

洪水による杉安の堰口の流亡など困難な問題が起こり、出資者の資金の供給が中止になるなど幾多の苦難がありました。これらを乗り越え、享保7年に第一期の工事を完了しました。この井堰は、初年度において田畑あわせて14町歩を潤し、収穫も豊かになり、人々は久右衛門の功をたたえました。

第一期工事が終了してから20数年後、第二期の工事が完了し、新たに田畑80余町歩を得ました。最終的に、杉安井堰の恩恵は、清水・現王島を除いた穂北8ヶ村におよび、延長2里22町40間、田地灌漑面積600余町歩にも達しました。

延岡藩は、久右衛門の功を称えて手当て米を給し、乗馬帯刀も許可しました。また、村民は久右衛門の居宅を修補してその徳に報い、年々米15石を永代に寄与することにしました。

資料

*1~2 : 杉安堰土地改良区「児玉久右衛門を語る」紙芝居

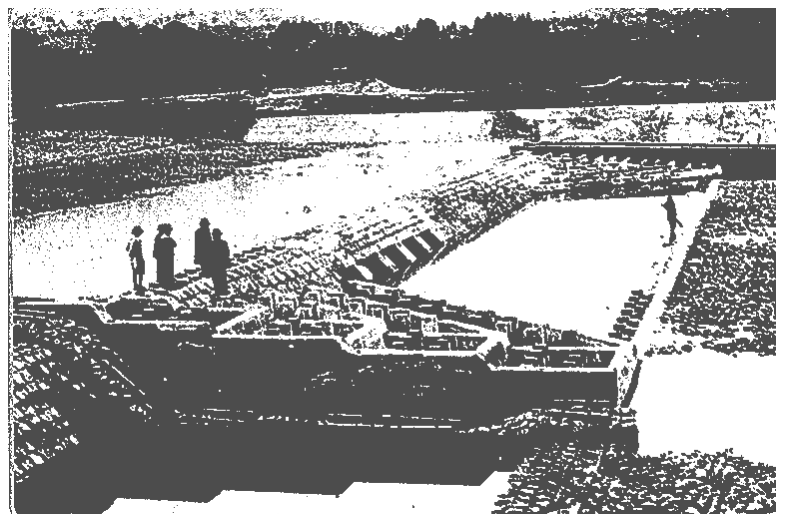
*写真3 : 杉安堰土地改良区資料



第一期工事が完成(かご堰)*1



通水式の様子*2



昭和10年頃にコンクリート堰となった杉安井堰*3

5 流域の土木建造物

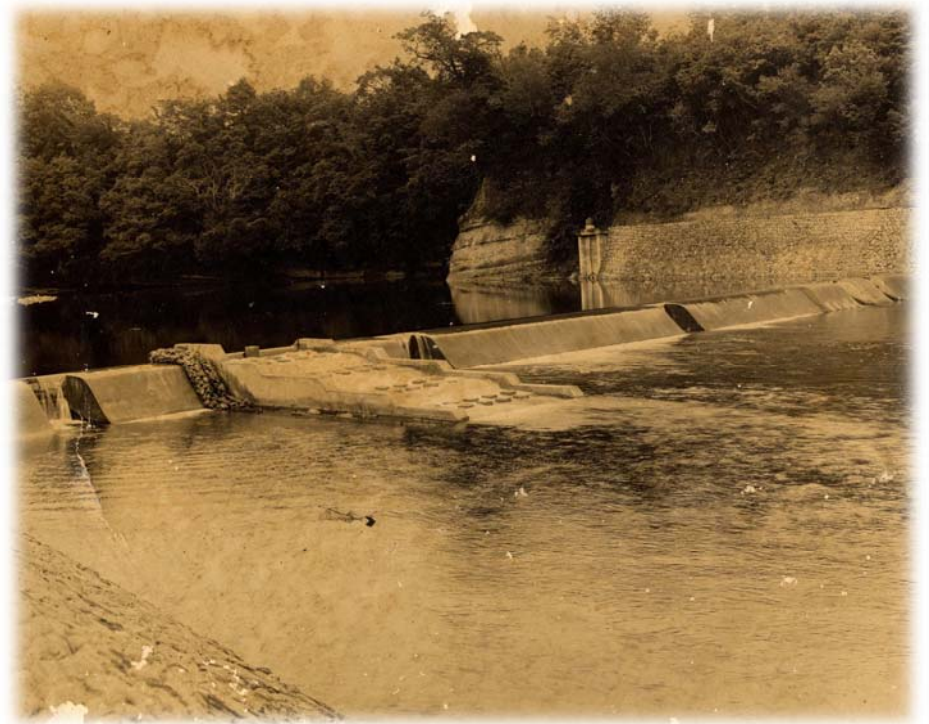
) 金丸堰

金丸堰は、明治4年(1871)、新田村(現新富町)柳瀬出身で、佐土原藩最大の役所「井出方」の附役だった金丸惣八が、妻町(現西都市)右松で一ッ瀬川を締め切り、川幅27mの堅固な堰(蛇籠を並べた芝堰)を完成しました。さらに、右岸の柳瀬まで約4kmの地堀水路を開削し、黒生野・現王島(現西都市)・柳瀬の一带に約40町歩を開田して灌漑しました。明治12年には、新田村伊倉の松本覚兵衛が堰堤に手を加え、伊倉用水路を完成させました。

しかし、明治42年8月の暴風雨洪水のために堰全体が大被害を受け、従来の棚掛け法から枠堰に変更し、明治44年3月に完成しました。土屋村長は、この堰の竣工時、創設者金丸惣八の功德を偲び、感謝報恩の意を表して、それまで栗唐瀬堰とよばれていた名を「金丸堰」と改めることを提唱し、以後、金丸堰とよばれることになりました。

左岸地区は、改修新設工事が逐次進められ、沿海開拓地まで通水しましたが、昭和20年(1945)の3度の台風で決壊し、150名の軍隊の応援で復旧工事を行いました。さらに戦後の決壊で堰堤の腐朽も重なり、第2回の全面改修が県営の災害復旧工事として行なわれ、コンクリート重力固定堰が昭和23年(1948)に完成し、800町歩の灌漑が可能となりました。さらに、昭和47年には堰堤改修工事が施工され、灌漑面積も右岸2地区、左岸4地区の1000余町歩(約1000ha:新富町580ha、佐土原町376ha、西都市50ha)に達し、県内最大級の受益面積を有するようになりました。

金丸堰は一ッ瀬川流域の重要な財産であり、毎年、旧暦1月16日に郷土の先賢の遺徳と大偉業を偲び、金丸堰記念祭を行い後世に残しています。その一ッ瀬川によこたわる金丸堰の雄姿は、一ッ瀬川流域の発展の源として住民に親しまれています。



昔の金丸堰(年代不明)
(写真:土屋光弘氏写真アルバム)

5 流域の土木建造物

2) 橋梁

1) 潜水橋

潜水橋とは、欄干が無く、車一台がようやく通行できる程度の小さな橋であり、洪水になると水没し、通行不能になってしまいます。コンクリートの桁橋にすることにより、洪水時の抵抗を少なくし、橋自体が流されないよう工夫されています。潜水橋は、水面と橋の高さに差があまり無いことから、まるで水の上を歩いているような感覚を与えます。現在、一ツ瀬川及び支川には 8 つの潜水橋（福島、柳瀬、千田、千畑、現王島、一ツ瀬、筑後、大島）がかかっており、河川景観を壊さない昔ながらの情緒を感じさせてくれます。



千田潜水橋



柳瀬潜水橋



千畑潜水橋



福島潜水橋



潜水橋には欄干が無い（柳瀬潜水橋）

5 流域の土木建造物

）百間橋

かつて、米良村村所字桐原から鶴に通ずる米良川（一ツ瀬川）に掛かる橋を百間橋と呼んでいました。百間橋は、その名の通り長い橋で、よく揺れ動いて危険であったとの記録があります。古来、米良川を渡す橋として、百間橋は重要な役割を果たしていましたが、米良川が氾濫する梅雨の頃から大雨や台風などが襲来する頃までには、水や木材の流れによって毎年流失していました。そのため、橋の架け方についての詳細な記録が残されています。（参考資料参照）

）新名所一ツ瀬 11 橋

国道 219 号（現在の米良街道）に架かっている 11 本の橋は、当時の架橋技術の粋を集めただけではなく、それぞれに異なった工法を用いているため、形態、色彩がみんな違います。赤、銀、白、緑といった色とりどりの橋が溪谷に虹のように架かっている様は、米良街道の新名所となっています。

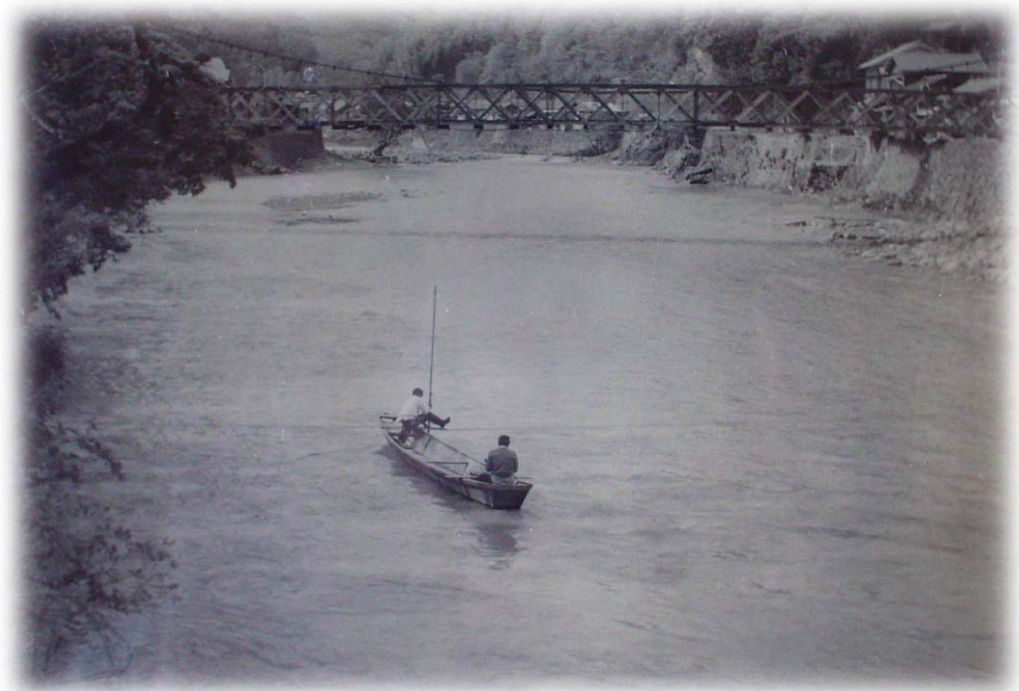
また、国道 219 号には「山桜」「染井吉野」「緋寒桜」の 3 種類の桜がこれまでに約 2,000 本植樹されており、「桜ロード」と言われています。



写真：リフレッシュ西米良 calendar

）各河川を渡河する供用中の主な橋梁

- ・ 一ツ瀬川：日向大橋、一ツ瀬橋、新瀬口橋、山角橋、下水流大橋、穂北橋、杉安橋、米良稻荷橋、横野大橋、かりこぼうず大橋、村所橋、大河内橋
- ・ 三財川：現王島橋、濁川橋、受関橋、鳥子橋、清水橋、霧島橋、戸敷橋、青山橋、荒武橋、岩崎橋、上の宮橋、諏訪下橋、金倉橋、囀橋、吐合橋
- ・ 三納川：平郡橋、吐合橋、雁亀橋、観音橋
- ・ 南川：原田橋



架け替え前の村所橋と舟
写真：中武雅周氏より提供

5 流域の土木建造物

4) その他の土木建造物

) 伊倉用水路

伊倉用水路の創設者松本覚兵衛は、文政 9 年（1826）6 月伊倉村（現新富町伊倉地区）に生まれ、漢数の学を修め測量の術に長じ、伊倉名の里正（庄屋）となりました。

伊倉の地は水田が乏しく一戸平均 1 反（10a）もなく、住民はごくわずかの米を混ぜた麦と粟飯を常食としていました。覚兵衛はその貧しさを憂い、これを救済するため金丸堰からの用水路開設を企画して住民に諮りましたが、住民は多額の負担をしぶって難色を示しました。その後、公債証書の借り受けや自他の土地・家屋を抵当にして資金の調達に苦勞しながらも、官許を得て明治 12 年（1879）12 月に着工しました。ところが、水路計画途中の岡富地区は、隣村の穂北に属するため地主の承諾を得ることができず、設計を変更して新田村の地にトンネル 2.5km を掘る難工事に着手しました。覚兵衛は現地に小屋を建て、そこに寝起きして工事を督励し、約半年の苦勞の末に全線 8.7km の伊倉用水路が完成して約 40 町（40ha）の畑が水田となりました。

その後、伊倉用水からの分水が進み、富田村境まで延長され、50 年後の昭和 5 年の灌漑反別は 500 町（500ha）に達しました。昭和 33 年の大干ばつや昭和 36 年の集中豪雨の被害ため、用水路改修が急務となり、昭和 36 年に取水口から富田干拓までの水路の改修と延長に着手し、昭和 43 年に完成しました。この事業により、幹・支線水路の約 10km が整備され、その受益面積は 605ha、受益農家は 702 戸となりました。



) 川郎淵隧道（当初は水車の動力源）

明治 30 年代（1898～）の中頃、川郎淵隧道が最初に堀削され、三財の耕地面積の拡張に大きく寄与しました。三財川は、寒川の山並みの水を集め、一気に流れ下ると、突き出した小豆野台地の崖にぶつかり、ここで直角に流れを変えます。この淵を川郎淵と呼び、昔は河童が住んでいると言い伝えられていました。

明治の頃、福王寺に住む西島松次が、三財川の水を利用して水車による精米業を思い立ち、福王寺まで水を引くための調査を重ね、難工事を覚悟の上で石工の技術を生かしたトンネル工事を行いました。工事は無事完了し、川郎淵からの水は福王寺まで流れ込み、年中枯れることなく水車は終戦後まで回り続けました。川郎淵隧道は、昭和 55 年、直径 60cm のパイプが敷設されました。

参考資料 百間橋（米良橋） 割木を並べた橋の作り方

材料集め

橋をかける材料は、各組ごとに用意しなければならないものと、個人の責任において用意しなければいけないものがありました。各組ごとに準備すべきものに、馬と称する柱材があり、これには松材を使用しました。もう1つは橋桁の材料があり、これには杉材を用いました。また、架橋の時に組むやぐらにはコジイの木を用意しましたが、生木が重いので、いずれの材料も少なくとも作業の2・3ヶ月前に切って、皮をはいて準備しました。結束用のフジカズラは、組総出で取りました。各人で用意するものには、橋の上部にのせる板を用意したといいます。

作業組の編成

西の区と東の区に分けて作業組を編成し、全体で8組用意しました。作業区は7区でしたが、西側の作業区は水中で深みが胸ほどまでであるため、ここに2組を配置し、この配置順は年を追って順次移動したといいます。

桥架け作業

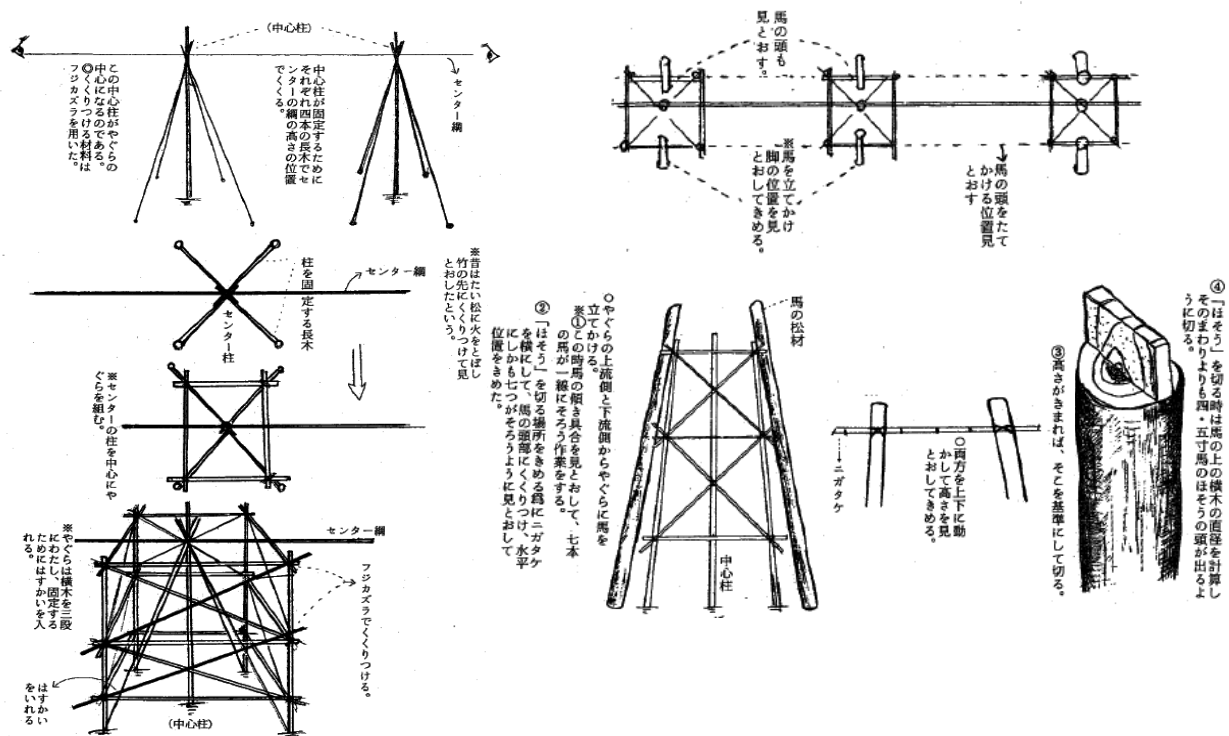
桥架けは、ほとんど毎年行われた重要な行事の1つで、川をはさんで西と東に頭取が決められ、前日までは材料集め等の準備を完了していなければなりません。その日は、橋を作る下瀬の川原に祭壇が設けられ、米良山行者中武貞五郎氏の安全祈願が行われ、これにて作業開始となります。

(1) 橋のセンター決め

両岸の橋の中心となる地点に、緒でなった直径7.8mmの綱をはります。両方からこの綱を見とおした位置に、等距離になるように7本の中心柱の長木を立てます。

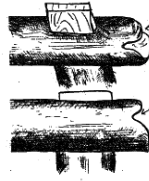
(2) やぐら組み

センターの柱を中心にやぐらを組みます。

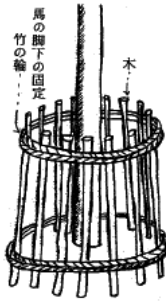


(3) 馬立てと固定

やぐらが出来て、馬をたてかける位置が一線にそろった時に、両方から馬をやぐらに立てかけます。馬の基礎固めには、竹輪2個を予め馬木に通し、竹輪の中にコジイの木を入れて、竹輪で上下2段に固定します。竹輪の固定が終れば、ひとかかえもある大石をこの中に入れて、馬木が動かぬように基礎を固めます。全8組がそれぞれ7個の馬を組み立て、この作業が終了するのが午前中いっぱいの作業となります。見とおすと、7本の馬が一線にならび、きれいなものであったといいます。



⑤ 両方の馬の間に「ほそま」が出来たら、横木をはめる。横木には綱がかけやすいために、かかりを作る。



馬の脚下の固定
竹の輪

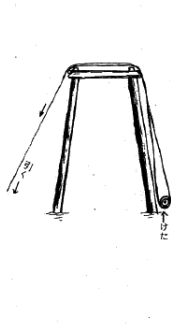
⑥ 馬の固定



この竹の輪は、馬の脚に固定して、綱をかける。

(4) けた上げ

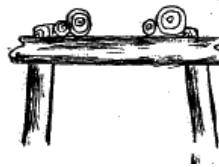
馬が立ち終ると、一番勇ましいけた上げです。けた上げは百間橋架けの最も見ごたえのある作業で、この作業の時には橋揚げの両岸には、どっと村人が見物に押寄せたものです。けたに綱をかけて綱の端を馬の横木に設けた綱の取り付け所にかけて、反対側からけたを左右同時に引き上げます。



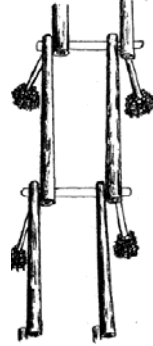
① 綱のかけ方
横木の端と綱をかけるには、引手と綱の間に、綱の端と綱の端をかける。綱の端と綱の端をかける。綱の端と綱の端をかける。



② けたの上げ方
力の強い人が選ばれて、足腰けたをかたにかついで、馬に綱をかけて、馬をとり上げた。綱を引上げて、綱をとり上げた。綱を引上げて、綱をとり上げた。



③ 馬の横木上のけた。



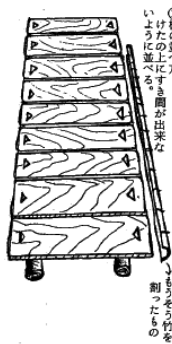
厚さ一寸五分、長さ七尺、幅七寸、ヨキで三角形の穴を、両方にあける。

(5) 板のしき方

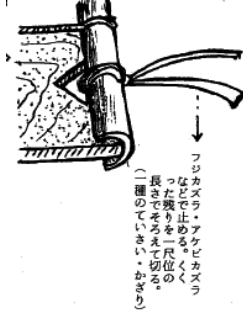
けた上げが競争で行われ、終了するとすぐに板しきが始まります。

板は1人につき1枚出しになり、板に竹をかけ、このような割り竹は、板が左右に移動しにくいように固定すると同時に、板のはしの凸凹がこの竹によって見えないように考え出したものといえます。けたは、かすがいで固定され、板の両ぶちに当てる竹は、モウソウ竹を半分に割り、内節を取ったものを用いました。

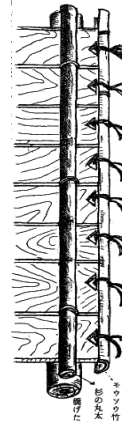
架橋は、秋口に水量が減る11月のはじめ頃を選んで行われました。橋が出来上がると両方から全員で渡り初めをして、すべての作業が終了します。橋の歩道幅は約1m50cm程度であり、両方から人がすれちがう時はようやく通れる程でした。



① 板の並べ方
けたの上にする間が出来ないように並べる。間が出来ないように並べる。間が出来ないように並べる。



フジカズラ・アケビカズラなどで止める。長く切った竹を一枚位の「種」のさいかき。



この竹は、馬の脚に固定して、綱をかける。

6 流域の文化人

1) 伊東マンショ (遣欧使節として渡欧)

伊東マンショは、都於郡城主の伊藤家の末裔で遣欧使節として渡欧した人物として、一ッ瀬川流域の人々に広く知られる文化人です。

マンショは、かつての都於郡城主、伊東義祐の孫で、父は祐青(すけはる)、母はキリシタン大名として有名だった豊後の大友宗麟の姪であったといわれています。この大友の縁で、マンショがの遣欧使節に加わったのです。

今から 400 年余り前の天正 10 年(1582)1 月、公式使節として来日した神父ヴァリニャーニに伴われて、4 人の少年が長崎から出航しました。苦難の船旅に耐え、天正 13 年(1585)ポルトガルに到着後、欧州各国の国王や教皇に謁見し、翌年リスボンを出航し、天正 18 年(1590)6 月、8 年ぶりに帰国しました。この使節の果たした最大の役割は、当時の西欧社会に日本の存在を知らせるとともに、印刷などの西洋文化を持ち帰ったことです。

この使節の首席であった伊東マンショは、帰国後に布教活動を開始しますが、秀吉によってキリシタン追放令が出され、布教は出来なくなりました。しかし、マンショは長崎の教会で司教に叙せられ、43 歳で亡くなるまで布教に従ったといえます。マンショとは古代の殉教者をさすポルトガル語ですが、彼の生涯はその名にふさわしい一生だったといえます。

また、伊東マンショはキリスト教イエズス会の宣教師が発行した日葡辞書(ポルトガル語と日本語の辞書。約 400 年前の九州地方の方言、発音が分かる貴重な書物)の編纂作業や、イソップ物語などの翻訳作業にも携わり、かつそれらの書物をグーテンベルグ印刷機により複製して発行するなど、その当時の日本を代表する文化人であったと思われます。



2) 菊池家 (米良の領主)

菊池家(米良家)は、西米良村及び旧東米良村を中心とした米良地方を治めていた領主として、一ッ瀬川流域の人々に広く知られる文化人の家系です。

菊池氏の姓は藤原であり、藤原鎌足の後裔といわれています。一説には、菊池武朝が懐良親王の皇子良宗親王を奉じて米良山に入り、今に伝える大王御所に潜居したとの伝承があります。その後、領主武運のときに親族に謀られたため、嫡男の重次とその母を舎弟の菊池重房に託し、わずかの一族と米良山中に落ち延びさせました。一行は菊池姓を隠して米良姓を名乗り、米良一帯の 14 ヶ村(旧東米良、寒川、西米良など)を納め、銀鏡と村所とを交互に住し、江戸時代には小川に居城を定めました。

明治維新後、明治 2 年には米良主膳則忠公(米良第 17 代)が米良姓から旧姓である菊池姓に復し、菊池二郎藤原則忠と改名しました。また、則忠公は版籍奉還の際に所有する山林地を全て領民に分配して生活基盤を安定させました。当時、他の藩主の多くは、版籍奉還の際に領有する土地、人民を政府に返上していることと比べると、則忠公の処置の仕方は極めて珍しいことでした。則忠公は子弟の教育に力を注ぎ、文久元年(1861 年)に「弘文館」を開くなど、村民のよき指導者でもありました。

明治 16 年、則忠公の嫡男武臣公が男爵に叙せられ華族に列しました。その嫡男武夫公の時(昭和 8 年)に西米良村、東米良村から浄財を集め、村民の奉仕によって菊池御別邸(現在の菊池記念館)が建設され、武夫公に贈られました。則忠公が所有する山林地を領民に分配して約 60 年、村民が菊池家への感謝と愛着をもって、「殿様」、「閣下」と呼ぶその思いが形になりました。

現在でも菊池武夫公の後裔の方が、年に一度、12 月頃に米良に帰省されています。



則忠公銅像



武夫公

6 流域の文化人

3) 児玉久右衛門(杉安井堰を建設)

児玉久右衛門は、杉安井堰を建設した土木技術者として、一ッ瀬川流域の人々に広く知られる文化人です。

児玉久右衛門は、元禄2年(1689年)に穂北郷の庄屋の息子として生まれました。ところが、この地帯は水利の便が非常に悪く、取れるお米は年貢の10分の1程度で、先祖代々引き継がれた農地を手放す農家も少なくありませんでした。これを見かねた久右衛門は、米良川(現一ッ瀬川)より水を引き、水田の造成を行うことにより米の収穫量を増加させることを考えました。

その後、延岡藩の許可を得て、水路と井堰造りに着手しました。途中、出資者の変更、工事の妨害、洪水による堰の流失など幾多の問題がありましたが、第1期工事により14町歩(約14ha)、第2期工事により水田80町余(約80ha)を灌漑し、後に水田600町歩(約600ha)に達しました。近年になり幾多の改修と昭和8年及び昭和52年の大改修により現在の近代的頭首工が完成しました。

久右衛門の大事業に村民は深く感謝し、毎年米15石を永代子孫に寄贈していましたが、現在では奉賛金として霊前にお供えし、毎年11月には久右衛門を偲び慰霊祭が執り行われています。

また、一ッ瀬川の杉安頭首工のほとりにある「西都市土地改良歴史資料館」では、久右衛門の偉業や農業農村整備についての展示があり、郷土学習をする子供たちをはじめ毎年たくさんの方が訪れています。



久右衛門の像

4) 古月禅師(禅宗の高僧)

佐土原藩5代藩主惟久に請われて第42世として入寺した古月禅師は佐土原町佐賀利出身の人物で、東の白隠、西の古月と称されるほど高名な禅師であり、大光寺中興の人といわれています。

古月禅師は、寛文7年(1667年)9月12日に佐土原領内佐賀利に生まれました。姓は金丸氏。各地で修業を重ね、宝永元年(1704年)5代藩主惟久に請われて大光寺42世の住職になりました。

児玉久右衛門とも関わりがあり、人々を説いて杉安井堰工事の完成への協力を要請して廻り、工事完成後は久右衛門の事業を称えて銘文をつくり、その功をねぎらっています。

また、簡単な言葉で禅の精神をわかりやすく庶民に広めようと作った「いろは口説」は、盆踊り歌として今も親しまれています。85歳でこの世を去った古月禅師は、桃園天皇より「本妙広鑑禅師」の称号を賜りました。



古月禅師の分骨塔(大光寺)

5) 黒木正英(砂防村長)

黒木正英は、三納川の砂防事業、一ッ瀬川総合開発に取り組んだ旧三納村長として、一ッ瀬川流域の人々に広く知られる文化人です。

黒木正英旧三納村長は、毎年繰り返される水害に対し、積極的に事業を推進し、その結果、村民や県の土木関係者から「砂防村長」の愛称で呼ばれました。

黒木村長は、明治20年旧三納村に生まれました。三納村村議会議員に当選し、議会の土木委員長、議長、村助役を勤めた後、村長に就任しました。砂防事業の重要性を繰り返し訴え、就任と同時に三納川に初めての大流路工を建設しました(昭和26年着工、38年に完成)。さらに、西都市発展の根源となる一ッ瀬川総合開発にも取り組みました。こうした長年の大偉業に対して、昭和33年藍綬褒章を受章、さらに勲五等瑞宝章を受章するとともに、数多くの表彰状や、感謝状を受賞しました。

晩年は、西都市名誉市民として、余生を送りましたが、このような大事業が遂行できたのも、夫婦仲が良く、妻春子の内助の功があったためと言われています。

7 流域の民芸・
芸能・祭り

1) 民芸

流域内市町村の民芸の分布をその地勢からみると、そのほとんどが平野部に集中しています。平野部では、佐土原藩などから発信される文化・文明を受けて生み出された民芸があります。

) しゃんしゃん馬

しゃんしゃん馬は、かつて佐土原や妻地方において、鶴戸神宮へ参詣する新婚夫婦の花嫁を馬にのせ、花婿が手綱をひいた姿の情緒豊かな玩具です。



) 佐土原人形

佐土原人形は慶長の頃に渡来してきた朝鮮の人々が戯れに人形を作ったのが始まりとされ、明治初期から大正時代には人形作りが盛んで14軒あった窯元も戦後は殆どが絶え、現在は佐土原町内に2軒の製作所で残された型を基に復興されています。



) 佐土原の羽子板

全長20cmのやや幅の広い板です。佐土原地方では、正月に女兒の祝儀に羽子板を贈る風習があり、昭和初期まで続いていましたが、次第にすたれてしまいました。



) ぶんぐるま

ぶんぐるまとは竹製の「うなりごま」のことで、佐土原では春の市になると売られていたので「春ごま」ともいいました。上下の蓋に塗った赤と、胴の黒が美しいコントラストとなり、風雅な竹ごまとなっています。



) 久峰うずら車

久峰観音の延命長寿、無病息災の縁起物で全国知名の郷土玩具です。タラの木で作り、素朴な形的美しさと南国的な明るい配色と紋様が特色です。



2) 芸能

県境の峠を越えて人吉へ近い地の利からこの流域は熊本との関わりが濃く、肥後文化の影響を多分に受けています。伝承芸能のなかでは山岳部の神楽、平野部の臼太鼓踊りと風流踊りが注目されます。

かつての東米良・西米良の山中に生き続ける「村所神楽」と「米良神楽（銀鏡神楽）」はともに古い歴史と様式を持つ芸能です。「村所神楽」は南北朝の頃に武将菊池氏が、懐良親王の一子、良宗親王を奉じて米良に入山した際に西米良に移し広めたとされています。その後「米良神楽（銀鏡神楽）」が、東米良に入ってきたと言い伝えられています。

一ツ瀬川を下った西都市とその周辺は古墳群などの史跡や古い神社仏閣を残し、多様な民俗芸能を伝承する地域です。伝統を誇る下水流地区の「臼太鼓踊り」は、跳躍と縦横の激しい動きを伴ったダイナミックな太鼓踊りです。西都市の石野田地区と隣接する佐土原町平小牧地区にも臼太鼓踊りが伝承されており、由来と形式については

7 流域の民芸・
芸能・祭り

下水流地区のものと同じであり、奉納される時期から「十五夜踊り」とも呼ばれています。

また、佐土原町堤地区をはじめとする各地区に「いろは口説き」の盆踊りが传承されています。「佐土原盆踊り」はこの口説きを中心に、浴衣に編笠そして手に扇子という装束の踊り子が新盆の家を回って供養する江戸時代からの風習です。踊りには「たかとび」「やっここせ」「四つ竹」などいろいろな振りがあり、地区によって色合いが異なります。

流域一帯の地域は民謡の宝庫で、労作歌・祝歌・座興歌・踊り歌と内容も多彩です。民謡のほとんどは外から移入されたものですが、移出した元々の歌の根は生活環境の大きな変化で廃れたものが多く、ここだけで生きながらえているという皮肉な現象をみせています。険しい山々で囲まれており、漁港や商業港に適合した良港を持たなかったことが、環境の変化をゆるやかにし、結果として民謡を古い形のままで保存传承することに有効な働きをしたと思われます。

一ツ瀬川に関係の深い民謡として、一ツ瀬川下りの民謡が传承されています。良質の林木を産する米良から切り出された木材は、枝を掃われて谷に落とされ、流れに乗って一ツ瀬川を下っていきます。その作業の際に歌われていたのが、「木出し・木遣りの歌」や「エンサー」と呼ばれる木遣歌です。旋律は伊勢音頭系でにぎやかな囃子がつきました。

ドットコエーイ　そこで　ドットコセー　花は花だよ　エー　そこで　ドットコセー



米良神楽（銀鏡神楽）



下水流白太鼓踊り

写真：さいと-古代ロマンとあふれる自然-

3) 祭り

流域内市町村の祭りの分布をその地勢からみると、大きく「山の祭り」「平地の祭り」に分けることができます。「山の祭り」には、焼畑や狩猟の儀礼が取り入れられ、「平地の祭り」には稲作の儀礼が見られます。そこには、その土地に適合しようと創意工夫した人々の歴史があり、産業そのものが祭りの伝統を支えてきました。生きるための証・暮らしの文化の一つが「伝統の祭り」となっています。

参考資料		伝統の祭り
春まつり	・春おびしゃ ・銀鏡の春まつり	・弓の口あけと春奉射 ・毘沙門天祭
厄除け・夏まつり	・ダゴツヤとダゴマツリ ・イブクロ	・愛宕神社の喧嘩だんじり
十五夜・伝承のまつり	・都萬神社の更衣祭	
鎮魂・供養のまつり	・御武者まつり	・山陵祭（西都古墳まつり）
予祝祈願・冬まつり	・巖流神社例大祭 ・米良山の願立てと願成就	・速川神社例大祭 ・東西米良の冬まつり
信仰のまつり	・観音まつり（長谷観音）	・地藏まつり（石野田地蔵）
諏訪・稲荷のまつり	・狭上稲荷冬まつり	・児原稲荷例大祭
節分・仏教行事	・吉祥寺の鬼子母神縁日	

8 流域の遊び

1) 現在の状況

一ツ瀬川流域には、運動、魚釣りや水遊びを行う場所が数多くあります。

一ツ瀬川は、宮崎県では数少ない広い河川敷を持つ河川です。その広い河川敷を利用して、日向大橋と一ツ瀬橋の間には県民スポーツセンター（左岸：新富町側にゴルフ場、右岸：佐土原町側に運動公園）が整備されており、平日、休日問わず賑わっています。支川三財川の囲堰付近にも運動公園が整備されています。

川に接することができるように整備が行われている公園やキャンプ場は、椎葉村では矢立高原キャンプ場、西米良村では一ツ瀬川にある双子キャンプ場、西都市では尾八重川にある尾八重川キャンプ場、一ツ瀬川にある杉安川仲島公園などがあり、施設も充実しているため、シーズン中には多数の利用者が流域内外から集まります。

また、水遊びをする主な場所として、平野部では一ツ瀬川の杉安堰付近、金丸堰付近、一ツ瀬大橋付近、三財川の岩崎橋付近、囲堰付近、三納川の吐合橋付近があげられます。特に、三納川の吐合橋付近では、毎年8月に「三納っ子会」を開催しています。親子で河川清掃を行い、その後子供達が放流されたマスなどをつかみ取りする催しで、流域の市町村だけでなく、宮崎市などからも多数参加しています。また、「花づくり会」も開催されており、春には菜の花、秋にはコスモスが咲き乱れ、多くの市民の目を楽しませています。山間部では岩井谷川、尾八重川、小川川、一ツ瀬川、板谷川、矢立川などに子供達や家族連れが集まる場所があります。



県民スポーツセンター



一ツ瀬橋付近



囲堰付近



双子キャンプ場河川プール



双子キャンプ場



岩井谷川



双子キャンプ場付近



双子キャンプ場付近の釣り人

8 流域の遊び

2) 昔の状況

昔の遊び場などは、現在とは異なっていました。

河川の流れは速いが濁りは無く、長く広い瀬や底の見えない深い淵が随所に存在し、とても変化に富んでいました。その瀬や淵に魚介類が豊富に生息していたため、特に釣り場を選ぶ必要はありませんでした。現在に比べたら危険な箇所も多かったと思われるが、子供達は一部を除き特に川遊びを禁止されることも無く（昭和30～40年代は川の深い箇所だけ立ち入りを規制）、自由に川に下りて釣りや砂遊びをしていました。また、洗濯、障子・布団カバー等の洗い、谷川では食器洗いなど、生活の場としても川を利用していました。

その後、下相見発電所（現在は無い）などを初めとするダム・発電所の建設により、ダム堰堤から発電所までの区間は水量が減少し、魚介類も少なくなりました。それまで行ってきた天然の淵を利用した遊泳場での水泳なども、ダム完成後は学校のプール（昭和50年代以降に設置）で行うようになりました。また、平野部では度重なる出水被害により、河川改修を実施してきたため、陸から川に近づけない箇所も出現するなど、遊び場の状況が変化してきました。

しかし、一ツ瀬川は姿・形を少しずつ変えながらも、多くの自然が残り、川に接する箇所が多い親しみのある河川として人々に愛され続けています。

参考資料 昔の行事など

佐土原十ヶ町村対抗運動会

旧佐土原藩の管轄だった妻、三納、三財、住吉、那珂、富田、新田、佐土原、広瀬、都於郡の十ヶ町村による運動会が毎年秋に開催され、大いに盛り上がっていました。運動会の出場メンバーに選ばれた子供たちにとっては、大変栄誉なことでした。

運動会には佐土原藩主だった島津家の子孫の方々が観戦に訪れていました。

杉安での水泳大会（西都市 昭和初期）

一ツ瀬川の河畔に特設コースを設けて催されたもので、杉安橋のすぐ下で行われていました。木材業者が集まっていた杉安地区には、当時商工会組織があり、水泳大会のほか屋形船を出すなど、観光に力を入れていました。

